

たしてもだめなら・・・

では問題です。「フィギュアスケートの練習で、荒川さんは安藤さんより3回多く、8回のジャンプをしました。安藤さんは何回ジャンプしたでしょう。」

これは小学生の低学年の問題です。大人からすれば簡単な問題に見えるでしょうが、意外に間違える生徒は少なくありません。

どう間違えるかという、 $「11回」$ と答えるわけです。つまり $8 + 3 = 11$ という計算をするわけです。なぜ間違えるかと言えば、「3回多く」という言葉で「これは足し算だ」と思ってしまっているわけです。

このような問題を間違える生徒は往々にして計算なども「早くやろう。」とする傾向があります。そして答が間違っているとと言われると、「じゃあ引き算だ。」とばかりに間違い直しを完了してしまいます。

さて、この生徒は今後同じような問題を間違えずに解くことができるでしょうか。絶対とは言えませんが、おそらくまた同じように間違える可能性が高いと思います。問題点は「自分はなぜ間違えたか」ということを見つめていないところにあります。

小学校の算数の単元はかなり細分化していますので、学校では「たし算」の単元だと、とにかくたせば答えが出るものばかり、「かけ算」の単元ならかければ答えが出るものばかりを反復演習させることがほとんどです。つまり「要領のよい子」であるほど、文章題でも出てくる数字だけを見て、計算処理することで答を出すことができます。

「小学校の評定は二重丸ばかりだから、学校の勉強にはついていけない」と思っている方の大半は、このからくりにはだまされていると思います。

本来問題をしっかり読んで、理解したイメージを図などにまとめて考える癖を付けることが最も重要なのですが、小学校の低学年の時期に「悪い習慣」がついてしまうと、中学生や高校生になってからはなかなか直りません。「文章題が苦手」という人や「方程式を立てるのが苦手」という人の多くは、実はここに課題があるケースが少なくありません。

プリント学習塾などで、「間違い直しをやらせています。」というところでも、次に正しい答を書いてくれば、「そうそう、よくできたね。」と言ってそれで終わりになるはずですが。しかも選択肢のある問題などは、順番に選んでいけばいずれ「正解」にたどり着きます。こうなると正解を選べたとしても本当にわかっているのかは怪しいものです。

うちの塾でも基本問題の間違い直しは徹底して行いますが、「たしてもだめだったから、引いてみました。」などという考え方は、たとえ小1であろうと認めることはしていません。本当の意味で「わかった!」という感動がなければ、真の実力には結びつかないからです。